

特集 ■ 法然上人八百年御忌、浄蓮寺開創八百年

# 念仏すけささぬ人(八)

— 角張成阿のこと —

高橋 富雄

成阿ここにもかくありて

学生骨になりて念仏やうしなはん  
ずらん

(賛頌 学者ぶる智者のまねび  
に本願の念仏道を失はんずれ)

自力の智慧をたのむスコラ学者  
(専門学者) たちの「術学」(ペダ  
トリー。学者ぶること)。それが「本  
願の念仏」を遠いものにしてしまっ  
ているのだ——法然さまは、そうお  
っしゃっているのです。

まず「学知」という名の「自力の  
怨念」から解き放たれて、「これはそ  
の事を詮にはいふよと見ること」の  
原点に立ち返るために、マナーリズ  
ム化して業にも似た因襲に呪縛され  
ている自力学知から、「ひとりだちせ  
させてすけささぬ」自然の他力の生  
知に立ち戻るので。

『正源明義抄』『大原問答』の段で  
「角張成阿この人を見よ」の名場面  
を見たわたしたちは、「隆寛本法然伝  
記」という衝撃的な法然伝記の新紹  
介によって、「アンコール成阿ここに

またかくありて」の感動を新たにす  
ることのできる絶好の機会に恵まれ  
ていたはずなのです。

にもかかわらず、この天与の史料  
を是非する「高等センモンセンス」  
は、賛否いずれの論においても、角  
張成阿を正面から問題にすることな  
ど、全くなかったのです。わたくし

のような「自然生知のコンモンセン  
ス」にとつては、全く予想外のスコ  
ラシテイシズム(専門科学)だった  
のです。念のため、センモンセン  
スは「専門科学」、コンモンセン  
スは「新渡戸稲造の批判的用語です。  
識知」。どんなことが「意外ニュー  
ス」だったのでしょうか。詳細は拙著『評  
伝角張成阿弥陀仏』第三部「隆寛本  
法然伝の部」に譲り、ここでは単刀  
直入「隆寛本法然上人伝記に成阿本  
という点」に限ってふれてみます。

この新出伝記では、『九卷伝』や  
『四十八卷伝』のように、権威ある  
正伝のようにみなされている伝記に  
対応する前半部を終えて、「さて」と  
改まるような形で、「上人言葉難亡脚  
(忘却し難く) 忽に記に載て覚むた

めなり」と筆を改めて書いている部  
分が本命です。「原隆寛本」と言える  
くだりです。

そこに、どの正伝、定本にも全く  
見られない重大な新事実が、二つ、  
事もなげに、上人自身のことばとし  
て語られているのです。

一つは、「一枚起請文」が、ひとり  
勢観房源智のために書かれ、手づか  
ら彼に授けられたというのでなしに、  
不特定多数の信者のために、しかも  
前以て手書用意されていたという驚  
天動地の事実です。

その二は、「古来の先徳、みなその  
遺跡あり。しかるにいま精舎一宇も  
建立なし。御入滅の後、いづくをも  
てか御遺跡とすべきや」との法蓮房  
の問いに「あとを一廟にしむれば、  
遺跡あまねからず。予が遺跡は諸州  
に遍満」し「念仏を修せんところは  
みなこれ予が遺跡なるべし」と答え  
たという定説に対して、「若遺跡と思  
はんば浄華なるべし」とここでは答  
えて、浄土宗京都四箇本山の一たる  
浄華院に別格遺跡の承認を与えてい  
ることです。

これは、浄土宗にとつては、「あれ  
かこれか」(アントウエーダー・オー  
ダー)の択一の問題として、理論的  
には「一紙小消息」などにいうとこ  
ろの「悪人なをむまる、況や善人  
や」と、醍醐本にいう「善人尚以往

生 況悪人乎」の問題と全く同質同  
格の絶対矛盾の自己同一とも称すべ  
き一大事です。議論が分かれるのは  
当然なのですが、わたくしが異とす  
るのは、そのいずれにも、わが角張  
成阿が、問題の要の位置におかれて  
いること、にもかかわらず、論者は  
これと正面対決することなしに、そ  
の是非を定めようとしていること  
です。

一枚起請文については、隆寛が拝  
受したのを、法然上人の赦免に尽力  
した光親卿に懇望され献上したので  
代わりに「角張入道子息具信のを所  
望して」秘蔵しているとあるのです。  
これは、成阿に代わって子息具信が  
上人に近侍、拝領したものとすべき  
ものです。浄華院については「角張  
入道などの助成」により十二光院を  
建立、念仏聖の道場としたとあるの  
です。

肝腎要の二大眼目に、どちらにも  
成阿が中心人物の一人として顔を出  
しているのです。信空・源智、聖覚  
・隆寛とは違う形で、しかし法然門  
下MIP(最重要人物)の一人とし  
て「角張成阿」の名があったこと、  
しかし上人臨終段階では、座下にな  
かったことが知られるのです。最後  
の謎と時の問題が残されているので  
す。

(東北大学名誉教授)